

# SPE日本支部創設 30年に当って

村上健吉  
(1981~1983)



私は昭和56年の7月から昭和59年の6月まで3年間SPE日本支部の支部長を務めさせて頂きました。それまで高島直一さんが支部長として会議の折名司会ぶりを発揮して居られましたので、いざ私の番になったならば、やっていけるかなとそれなりに緊張しましたが、今ふり返って見ると楽しい日日であったと感じられます。

SPE日本支部の行事として今でも記憶に強く残っておりますのは1968年10月に京都国際会議場で行われたRETECだったと思います。あの当時としては非常に大規模なスケールでしたので、あの計画を実施するに当って実務に当たられた方は、その準備が大変だっただろうと推察します。

特に瀬戸正二さんは予稿の内容チェックから、同時通訳のリハーサルまでこのために随分と時間をさいて奮闘されている姿を小生は傍から拝見させて頂いて本当によくやられたと畏敬の念を持って居りました。そして本番では総てが完璧でスムーズに運営されたと思って居ります。

当時の会長だった Fongさんと Egan社の Gregoryさんが、私の在籍していた積水化学に見えられ、Gregoryさんから押出理論の話をして頂きました。あの時のRETEは、テキストは英文だったし同時通訳が流れてほんとうに国際会議だったと思います。

その後1974年には、サンフランシスコで行われたANTECに日本からスピーカーが大挙押しかけて日本支部がスポンサーとなったセッションが開かれました。セッションの行われたのは5月15日でしたが、会場はヒルトンホテルで午前中は Sandersさんが、午後は住友ベークライトの重村さんがModeraterとなって講演会が進行しました。午前中は材料関係、午後は加工ならびに機械に関するスピーチが行われましたが結構質問もあり良かったと思います。

その折講演議題となったものは今日振りかえって見るとほとんどの議題が実用化されて成功を納めているように感じます。その夜ホテルのBall roomで総会が行われましたが、アメリカの会議の進行のうまさに驚嘆しました。この時は会長から各種の賞が該当者に授与されて出席者が心から祝福しました。その間会食がありましたが、アメリカ人は夫人同伴の人が多く、日本では想像できないような和気藹々としたものでした。また散会後にBall roomでダンスパーティがありましたが、私共はこのような場に出たことがないので傍から眺めるだけで誠に羨しい光景でした。

その前日にはカリフォルニア支部の特別なお好意で Stoesser Industryという射出成形工場を見学させて頂きました。ここでは何から何まで自社工場内でやっているのに驚きました。5月16日はサンフランシスコ最後の夜をホテルの最上階のレストラン・ヘンリーで行い、この会をヘンリー会と呼び将来共一同親しく交際しようと契り合いました。私はホテル滞在中三菱油化の由井浩さんと同室させて頂きましたが今でも良き思い出として残って居ります。この折にも瀬戸さんがCo-ordinatorとなって盡力されました。瀬戸さんはこのセッションを自ら計画しアメリカ側と交渉されたと思いますが、スピーカーがなるべくいい発音をするようにという配慮から Preprint の内容を Sandersさんに読んで頂いて、これをテープに吹き込んで各人の

リハーサル用に配られました。このように万全の準備をすすめられた御苦勞は大変だったと思いますが、Sandersさんにも非常にお世話様になりました。私事になりますが、サンフランシスコからの帰りは瀬戸さんとハワイに寄って一日観光を行いました。楽しい思い出となっています。

その後1980年のJAPAN PLASの前日10月31日に随分長く中絶していた第2回目のJAPAN RETECを開催することができました。この時は当時の副会長だったBo.Chinnerさんが来場され大阪のOMMビルにおいてRETECを行いました。余談になりますがBo.Chinnerさんは次期会長になることが決定している方とのことでしたがお若いのに驚きました。アメリカの人事の考え方が日本とは異なるものと考えられます。

このRETECは丸一日のスケジュールで日本側の講演者を主体としたものであり、Bo.Chinnerさんに特別講演をして頂きました。このRETECはあまり国際的な雰囲気ではありませんでしたが、第1回のRETECに比べて日数も短く、通訳の必要なものも1件でしたのでボランティアとして運営に当たる役員の皆さんにあまり負担がかからず実施しやすい方法との認識が高まり、以後JAPAN PLAS 開会の前日にRETECを行うというパターンが定着しました。

私が支部長在任中に行われたのは第3回および第4回目のRETECです。第3回目のRETECは1982年11月16日当時の会長だったHaasさんが来場され東京の霞ヶ関ビルにおいて行われました。この時は高島さんが運営委員長として活躍されました。当日の昼食時に日本支部の運営方針について相談したいとの話があり、会員数をふやすこと、収益事業に力を入れることなどの御希望ができました。当時SPE本部では財政赤字に陥り、これをカバーするために収益事業に力点を置いているとのことでした。この件については日本支部では本部とかなり事情が異なるので支部役員の検討結果ではアメリカと同じやり方では難しいという結論になりました。

ついで第4回目のRETECは1984年5月22日、当時の会長だったKuhlkeさんを迎えて新装なった大阪市立工研において行われました。Kuhlkeさんは奥さん同伴で来られましたが、21日は永井さんが奥さんを京都に案内され、その夕方に永井さんのお世話でKuhlke御夫妻の観迎宴を開きました。奥さんは京都観光について大変素晴しかったと喜んで居られましたが一番印象に残ったことは何ですかとの質問に善峰寺の松の木だったということで、外人の見る目が私達と随分違うなと感じました。講演会当日は私の家内が奥さんに同伴し大阪城を見物して頂きました。

このRETECは鐘ヶ淵化学の館さんが運営委員長として活躍され、通訳から会長さんの車などいろいろ御配慮を頂きました。また会場を提供された大阪市立工研では永井さん、細野さん他職員の方々に大変お世話様になりました。

第4回目のRETECでは、会長講演の他にアメリカのApplication Engineering社ならびに韓国の工業技術院から講演があり、前2回と比べると大分国際的な雰囲気をもった会合へと発展して来ました。また講演会への参加者も140名にも達し、大変盛会でした。帰りの車の中で館さん、Kuhlkeさんと盛会でよかったと互に喜び合いました。講演会終了後のパーティには、会長祝辞につづいてSPEのVice-President for International AffairsのJacques de craeneさんから御挨拶を頂きました。また台湾支部から孫さんが出席されました。

その他大島さん、中尾さんをはじめSPEの発展に盡力された大先輩の方々にも御出席頂いて懐旧談に花が咲きました。パーティには瀬戸さんが発案され、細野さんが技術指導されていると同っておりますがプラスチックにちなんだ独特の記念品を会長に贈呈する慣しになっております。これは蝶々をキャストインしたPMMA製のブロックですが、瀬戸さんが会長さんに手渡されその折瀬戸さんのWelcome speechが行われました。

われるのが恒例になっております。会長もSPE日本支部への良き思い出として持ち帰られたことと思います。

今回第5回目のRETECと併せて30周年記念行事が計画されておりますが、このような行事が益々発展されますよう御祈り申し上げます。

さて以上のように小生支部長在任中にRETECの活動が活発化して来たことは喜ばしいことですが、これにはSecretaryの立場で居られた大阪市立工研の永井進さんの八面六臂の御活躍があったことを特筆しなければなりません。永井さんは計画立案段階から細かい事務処理までほとんど一人で切り盛りして来られました。本部との手紙のやり取りから、会計上の帳簿の出納などほんとうに御苦勞が大変だったことと拝察します。また同じく工研の細野さんには達筆をふるわれて手紙や書類作成など大変御盡力頂きました。

今日のSPEは大島さん、瀬戸さんをはじめ大阪市立工研職員の皆さんのたえない精力的な御支援がなかったら存在していなかったでしょう。また私もその任が曲りなりも果せたのも以上御支援のたまものと深く感謝して居ります。

また主として東京で隔月毎に開催して来ました例会もメンバーの勉強の場としてまた親睦の場として非に有意義なものであったと思います。

プログラム作製に当っては日石化学の神谷さんが非常に盡力され、時宜に適した有益なスピーカーを選定されました。例会の講演会はアトホームな雰囲気の中で、かなりつつ込んだ質問があり、スピーカーの方からは裏話としての失敗談などをおりませで、一般の講演会では御伺いできないようなお話を披露して頂くことができました。

私自体もお話の内容が直接の専門の事項でない場合の方が、プラスチック・エンジニアリングの底流を知るという意味から重要であり、広い角度から種々啓発されるものがありました。

私が支部長在任中には、すでに御紹介した方々の他に住友ペークライトの重村さんが Councilorとして、また松崎さんが Treasurer として活躍されました。

それから大変残念なことです。私が支部長就任の直前1981年の5月23日に当時の日本支部の Treasurerをやっておられた本間敬一郎さんが病気で亡くされました。本間さんはSPE日本支部の役員として長らく御盡力を頂いて居りましたが、誰とでも親しくなれる心暖かい方でした。英語が御上手で、ピアノを弾き、ダンスも素人ばなれしていて、社交的な面で恥しがりやの多い一般日本人とは違った素質を持って居られたと思います。すでにのべましたサンフランシスコへも同行され、外地に不馳れなスピーカーへ何かと御世話を頂いたことも思い出に残ります。大阪府立成人病センターに御入院のところをお見舞したところ、吃驚する程やつれておられましたがつとめて明るく振舞ってお相手して下さいました。ほんとうに胸がつまる思いがしましたが、数日後に御逝去のお知らせがあり人生のはかなさを感じました。御冥福を心から御祈りします。

さて私が支部長をおおせつかった頃は高度成長は終わったものの、自動車・電機が輸出の好調に支えられて産業界全体が活性期にあったと思います。

その中であってこれらの産業分野で特にエンジニアリングプラスチックが本格的に採用されだしてプラスチック産業の構造変化が起り始めていたように思います。すなわち汎用プラスチックの大量消費時代から機能性重視へと変る転換期にあったように考えます。このような環境下でSPEの存在意義も大きかったし支部長経験者の瀬戸さん、高島さんからの御指導のもと何とか重責を果すことができました。

私の後任には斯界で多大の業績をお持ちになりまた先輩に当る工学院大学教授の山口章三郎さんに御引受け頂けることとなりました。これにより私もほっとした次第です。